

Title	錯綜する『内』と『外』： 四〇年代台湾文壇における「蓮霧の庭」と龍瑛宗を中心に
Sub Title	
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2006
Jtitle	三田國文 No.44 (2006. 12) ,p.1- 28
JaLC DOI	10.14991/002.20061200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20061200-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20061200-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 錯綜する『内』と『外』

— 四〇年代台湾文壇における「蓮霧の庭」と龍瑛宗を中心にして —

和泉 司

はじめに

龍瑛宗（一九一〇—一九九九）は一九三七年四月の『改造』（第十九巻第四号）の第九回懸賞創作<sup>〔1〕</sup>の小説部門に「パイイヤのある街」が佳作推薦となったことで作家として登場した。

当時、龍瑛宗の出身地である日本の植民地・台湾では、現在「台湾新文学運動」と呼ばれている近代文学運動が展開していた。一九三〇年代は、日本語による創作が活発化し『台湾文芸』『台湾新文学』の二誌が競合して、総督府の干渉や経営難の下でも、文学運動が続けられていた時期である。しかし、龍瑛宗はそのような台湾島内の文学運動に全く関わりを持っていなかった。

「台湾新文学運動」に関わっていた台湾人の作家志望者の多くは東京留学経験者か、あるいは台湾にある中等教育機関を卒業するなどしていた学歴エリートであった。当時の台湾でこのような経歴を身につけるために必要な能力やコストを考えると、ここで「台湾新文学運動」に実際に参加することができた人々はある程度限定され、互いにテキストについて以上の私的

な知識や情報も持ち合っていたであろうことが想像できる。故に、この運動内部は論争や路線対立などをはらんでいたものの、総体としては一種の共同体を形成して活動していたと言える。しかし、龍瑛宗は、公学校（台湾人向けの初等教育機関）高等科を出た後、専門学校に進んだところで学歴をおえており、東京留学経験もない人間であった。

そのため、龍瑛宗の『改造』誌上での登場は、台湾では相当の驚きを呼んだ。「台湾新文学運動」参加者の目標は大枠では「台湾文化・台湾文壇の確立・発展」であったが、個々の目的としておそらくはそれが本来の目的でもあっただろう。これは「内地の有名文芸誌デビュー」であり、そして台湾人で内地文壇でのデビューを果たす者が出るとしたら、それは「運動内部の誰か」であろう、という認識ができていたからだ。<sup>〔3〕</sup>

しかし実際に「内地の有名誌」であった『改造』に台湾人として最初に登場したのは、「台湾新文学運動」とは何の関わりもない台湾銀行の職員である龍瑛宗という無名の青年であった。この『改造』でデビューしたということと、「台湾新文学運動」とは関わりがなかったという二点が、この後の龍瑛宗の

作家活動において、大きな意味を持っていたのである。

### 「台湾新文学運動」後と龍瑛宗

一九三七年に『台湾新文学』が廃刊となり、七月に日中戦争が始まると、「漢文」のテキスト発表に対する総督府の弾圧も重なって、「台湾新文学運動」は途絶えてしまった。台湾唯一の台湾人資本新聞であった『台湾新民報』などが台湾人作家たちのテキストの連載を行うなどという形で文学運動は続いていたが、その規模は以前よりも縮小せざるを得なかった。

その中で、龍瑛宗は『改造』懸賞創作への入選で得た『改造』やその関係作家とのコネクションによって改造社の文芸誌である『文芸』や文芸同人誌『文芸首都』にテキストを発表する機会を得つつ、『台湾新民報』や『台湾日日新報』などでも頻繁にテキストを発表していた。テキスト発表の機会に対して龍瑛宗が非常に貪欲であることは、四〇年代の状況からも分かるのだが、それはこの当時からすでに始まっていたのである。そして、そのような二年以上の空白を経て、一九四〇年一月に、また台湾で新たな文芸誌が創刊された。『文芸台湾』である。

「台湾新文学運動」の時期には、文学運動に参加する在日日本人はごく少数であったが、この二年強の間にその運動を活発化するようになっていた。よって、『文芸台湾』同人には、多くの在日日本人が含まれており、彼らの主導の下、その中に「台湾新文学運動」期に活躍した台湾人の日本語作家たちが加わるという形になっていた。つまり、『文芸台湾』の運営は、

在日日本人の側にあったのである。

その状況に不満を持った「台湾新文学運動」参加者を中心に、『文芸台湾』から脱退した人々が四一年に創刊した雑誌が『台湾文学』であった。そして、多くの台湾人作家が『台湾文学』へ移籍する中で、龍瑛宗は『文芸台湾』同人に留まったのである。

この状況は、しばしば『文芸台湾』の台湾人同人が、在日日本人同人（非実質的経営者の西川満）の方針に反発して脱退した、という形で論じられている。そのため、台湾人対在日日本人、という民族対立構図にされやすい。故に、この分裂時に『文芸台湾』に「残った」とされる龍瑛宗は、構図的にいうと「裏切り者」のような立場に立たされてしまうことになった。

そして、おそらく当人もそれを長らく意識していたのである。うことは、戦後の随筆「『文芸台湾』と『台湾文芸』」での記述から推測できる。龍瑛宗はこの随筆の中で、『台湾文学』分裂時にその中心にいた張文環（一九〇九―七八）が、自分に対して偏見を持っており、そのために『台湾文学』に誘われなかったとしている。自ら積極的に『文芸台湾』に残ったわけではないことをアピールしているのである。一九八一年という時期的な要因もあつただろうが、自分は「民族」を裏切ったわけではないことを主張する必要を、三十年以上の時間を経てもなお、龍瑛宗は感じていたのである。

しかし、この分裂劇は、民族対立というよりは、旧「台湾新文学運動」派とその同調者の分離と言った方が事態をより正確に説明できると思われる。分裂した台湾人作家たちには、自分

達が台湾の近代文学運動を立ち上げ、リードしてきたという自負があったはずで、それをあとから出てきた在日日本人達にイニシアチブを奪われることが我慢ならなかったであろう。実際、当時の『台湾文学』派による『文芸台湾』批判のテキスト群には、民族差別を原因とするものはほとんど見あたらない。ほぼ全てが、『文芸台湾』を運営する西川満の方針への批判である。

こう見直す時、龍瑛宗が「台湾人でありながら」、「台湾文学」へ移籍しなかった原因も見えてくる。先述の通り、龍瑛宗は戦後になって、『台湾文学』へ移籍しなかったのは張文環が自分に隔意を持っていたことが原因であると述べているが、そもそも何故龍瑛宗が「隔意」をもたなければならなかったのか。それは、彼が「台湾新文学運動」の「仲間」ではなかったことに由来していたのではないだろうか。

いずれにしても、龍瑛宗は『台湾文学』分裂後も『文芸台湾』に残った。以降、彼は『文芸台湾』の台湾人作家の代表として、テキスト発表を続けることになる。内地雑誌への登場は四一年以降激減するが、一方で台湾内部のメディアへの登場は激増していく（『台湾時報』『台湾公論』『民俗台湾』『台湾婦人界』『台湾芸術』『台湾日日新報』など）。

これには、台湾の新聞・雑誌に強いコネクションを持っていた西川満の力も影響していたのかもしれない。西川にとつて、龍瑛宗は『文芸台湾』の貴重な台湾人作家であり、手放すことは出来ない存在だったからだ。

龍瑛宗は四二年一月にそれまで勤めてきた台湾銀行（彼は当

時、台湾東海岸の花蓮港支店に勤務していた）を辞め台湾日日新報社へ入社するが、これも『台湾日日新報』学芸部長でもあった西川のコネクションの可能性は容易に想像できる。故に『台日』への転職は、「台北に戻りたい」という龍瑛宗の要求に西川が応えた結果とも考えられるだろう。このように、龍瑛宗は強力に『文芸台湾』側に囲い込まれていたことが推測できるのである。

一方、『台湾文学』には、西川程ではないにしても、龍瑛宗のテキストへの批判もしばしば見られる。龍瑛宗ははっきりと『文芸台湾』側の人間と認識されていた。

このような「親西川」と見られていた龍瑛宗が、一九四三年になって突然『文芸台湾』から『台湾文学』へ移籍している。本稿の主眼は、この移籍後に『台湾文学』で発表された小説「蓮霧の庭」を読むことにある。龍瑛宗は、テキスト発表媒体によってテキストの内容を切り替える傾向が顕著であり、それから考えると、『文芸台湾』から『台湾文学』へ発表誌を移した時、彼のテキストにも大きな変化が現れたに違いないからである。そしてその「変化」を確認することは、龍瑛宗という作家の問題のみならず、同時代の台湾文壇を巡る状況を把握する上でも、重要なことであろう。

『文芸台湾』同人を辞め、『台湾文学』へ移籍するというのは、ちょうどこの時期、西川満が『台湾文学』の作家たちを想定した「糞リアリズム」論争を引き起こし、楊逵をはじめとして『台湾文学』派の作家たちによる激しい反論がなされていたことも考え合わせるとなお、非常に冒険なことであったはず

である。それほどまでして、龍瑛宗は何を求め、何をなそうとして『台湾文学』へ移籍し、そして実際に発表した「蓮霧の庭」によって、何をなしたのであるか。

龍瑛宗の移籍は、四三年九月の『文芸台湾』（第六卷第五号）で事後報告されており、また同年一二月の『台湾芸術』に掲載された黄得時「努力家龍瑛宗君」の中でも触れられていることから間違いないことである。ただし、龍瑛宗自身は戦後に「楊雲萍氏と私は、いままで立籠った『文芸台湾』の牙の城から、始めて『台湾文学』の城門に馳せ参じたわけだ。」と述べているが、楊雲萍については「社報」では触れられておらず、『台湾文学』に寄稿したあと、再び『文芸台湾』にも書いている。つまり、完全移籍をしたのは龍瑛宗だけであったことになる。

そして、その移籍後第一作の「蓮霧の庭」は、結果的には龍瑛宗の『台湾文学』における最後のテキストとなった。『台湾文学』が、「蓮霧の庭」の掲載された一九四三年七月の秋季号（第三卷第三号）の翌号、四三年十二月の第四卷第一号をもって廃刊になったからである。<sup>18)</sup>

故に、龍瑛宗と『台湾文学』の関係についてはそもそも判断材料が少なすぎ、移籍の動機や経緯、移籍による人間関係の変化、そして『台湾文学』誌上における彼のテキストがどのような展開を見せたか、などは、「可能性」を想像する以上のことは出来ない。しかし一方、唯一発表された「蓮霧の庭」のテキストに現れているものと、その『台湾文学』における位置づけ、さらに当時の台湾文壇と台湾の文化状況との関連を考える

上では、それが「唯一」の発表テキストであることが、より重要な意味を持つだろう。

### 「蓮霧の庭」の時間とテキストと「皇民文学」

「蓮霧の庭」は一九四三年七月の『台湾文学』第三卷第三号に掲載された。全部で十五ページ程の短編小説である。

このテキストは、二十歳の青年であった台湾人の「私」の間借りしていた台湾人住居に、在日日本人家族「藤崎家の人々」が転居してくることによって始まった交流についてを十数年後の「私」を語り手として進めていく物語で、全体は（一）から（七）までの章で構成されている。

その冒頭（一）は「藤崎君」からの手紙によって藤崎家の人々を思い出す契機が語られている。（二）から（六）までが十年程前までの藤崎家の人々との交流の場面となり、（二）の半ばから、十年程前の時間を、「いま」と表現して語るよう語り手の時間が変化している（つまり語り手の年齢と記憶とが三十代前半のそれから二十代初めに變化する）。

「藤崎家」の家族構成は、回想される時期において中学校受験を控えている長男の「藤崎君」、その父親の「藤崎氏」、母親の「藤崎君のお母さん」、長女で「藤崎君」の姉である十七歳の美加子、次女で「藤崎君」の妹である十二歳の万里子の五人である。その中で、「藤崎家の人々」との交流と、「私」が伝染病の「腹チフス」に感染し体調を崩したことが語り手として台北への転居になり、藤崎家の人々と別れたことが語られる。そして（七）で再び語り手の現在は（一）の現在へと立ち

返り、青年となり戦地から復員した「藤崎君」との再会を果たして終わる。

では、「私」が藤崎家の人々のことを回想している「現在」はいつごろと想定できるだろうか。

「私」が藤崎家の記憶を呼び起こすきっかけは、「藤崎君」から届いた手紙である。そしてその手紙は、「戦地」から届いている。この戦争は、「藤崎君」の戦地の様子を、「更に青い南海を渡つて」「鬱蒼とした密林や濃い白雲の頓してゐる緑つばい風景」の中に想像していることから、南洋を戦場にしていた太平洋戦争であると考えてよいだろう。つまり、「私」の「現在」は、「蓮霧の庭」が発表された四三年に合わせておいて構わないと思われる。

そこから、「私」の回想している時期を推測してみる。「私」は、五年程前まで藤崎家の人々との手紙のやりとりがあり、最後に別れたのは大体十年前だと語っている。そして、テクストの中心となっている藤崎家との交流の場面から別離までの期間は、二年程とされている。つまり、「私」と「藤崎君」とが頻繁に会っていた時期（藤崎家の人々と交流するようになってから、「私」が「腹チフス」でたおれるくらいまでの時期）は、四十三年の「現在」から十二年程前、一九三一年ごろと考えてよいだろう。

その頃の台湾は、台湾人の社会運動が弾圧され取り締まられていた頃であり、昭和金融恐慌の影響で不景気の波を受けていた頃でもあった。また、日本帝国の動向を思い出せば、この年には満州事変が起きている。昭和の日本帝国がここから満州支

配に乗りだし、帝国中央の植民地への関心が北方の「満蒙」へシフトしていくことで、南方「台湾」への関心が相対的に低くなるのを総督府当局が焦り、そしてそれが太平洋戦争開始後の「南進政策」において、台湾を南進の拠点に位置づけようと躍起になる遠因にもなっている。

しかし、テクスト内部では、直接このような状況に関わる描写はない。「私」と藤崎家の経済状況は、ともに良くないことが示されているが、それと時代背景との接続はなく、また「私」も藤崎家も、政治的立場の表明は行っていない。

「私」は中学校三年まで進んだところで父親を亡くし、その借金を背負ったことで学校を中退せざるを得なくなった。母親を伯父の家に預け、自らは「ひどい薄給の身」で「街のある会社事務員」として働いている。

一方、藤崎家の人々もまた貧しい身の上であることが冒頭で語られる。「藤崎氏」は「いまは青果会社の小使いを勤めてゐるが、その前は、某市で可成り手びろく商売をしてゐた」。それが、「大きい取引先の一軒が、倒産して夜逃げしてしまつたので、手形金の回収不能となり、資金に大穴を明けさせてしまつた。その上に運のわるいもので、家族の一寸した不注意が、火事になり、手持商品と家屋が丸焼けにされた。／それで完全にいけなくなつた」という状況で、そのために、通常在台灣日本人が住む場所ではない台湾人住居へ転居してくることにしたのである。故に、「藤崎氏」は、「藤崎君」に勉強を教えている「私」に対して、

「(前略) あいつは受験、受験と騒いでゐるが、もしも合格したら、どうしようかと、じつは心配してゐます。また借金しなければなりませんからね。他人様の息子さんなんか皆中学校へ行かせるのに、自分だけ生かせないのも、どうかと思ふし、——もつともこれは親としての見栄かもしれないが。」

と打ち明ける場面もある。ここでは、「貧しくとも中学校へ行ける」在台日本人と、「貧しければ中学校へ通うことがまもなくなくなる」台湾人との対照も存在しているが、同時に、少なくとも藤崎家は、想像される「一般的な在台日本人家庭」の水準から比べると、かなり貧しいことも伝わる。いづれにしても、両者の経済状況は、家族の死や、取引上・家庭内の失敗によるもので、時代性との関係は薄いだらう。

しかし、一方で、「南方」に関する描写はテキスト内に散見される。先述の通り、冒頭で「藤崎君」が出征している戦地について、「私」は「さらに青い南海を渡つて、小暗い沼や、鬱蒼とした密林や濃い白雲の屯してゐる緑つぼい風景のなかに、藤崎君の姿を描いてみる」と述べているし、回想の中の藤崎家の会話にも、次のような場面がある。内地へ帰りたくないと愚痴る「藤崎君のお母さん」に対して、「藤崎氏」がたしなめるように言う。

「なあ、おまへ、もつと南方へ行つてゐる人たちを考へてごらん、ここよりずっと暑いですよ。それでも不平いはず

に働いてゐるぢやないか。要するに気持の問題だ(後略)」

また、同じ場面で、「藤崎氏」は「藤崎君」に対して、「(前略) もつとも、健坊(「藤崎君」のこと—引用者)には一度内地を観せなくちやならぬと思つてゐる。こいつは、台湾で生れて全然、内地をしらないから。なあ、健坊、内地へ行きたいだらう。」と問いかける。

「うん、行きたいとは思つてゐるけれど、住みついてみたいとは思はぬなあ。」

藤崎少年は、ニコリともしないで答えた。

「おまへは、ここで一生を終るつもりか。」

「うん、ここで一生終つてもいいよ、けんどさらに南の方へ行きたい気持もするよ。」

「おまへの顔は陽に焼けて相当黒いが、もつと黒ん坊になつてもいいのか。」

「僕は生つちろい顔は嫌だ。女の子みたいに。」

「ホホ、、、、ほんとに健ちゃん顔たら黒いわ。これで内地に帰つたら、村の人は南洋の子供と思ふだらうね。」

「あれ、あんなこと言つてゐる。母ちゃんだつて、南洋の女みたいに黒いわい。」

(以上、傍線は引用者)

このように、「南方」への意識については、複数の言及があり、ここでは「南方」への「進出」が少年の意欲的な姿勢とし

て語られている。ただし、先にも述べたように、満州事変を契機とする満蒙「進出」が、台湾での南進熱の遠因であるにしても、それが現出するのは日本帝国が南方への侵略政策を固めてからであり、この時期に「さらに南の方へ」という意識が台湾で一般的であったとは考えにくい。むしろ、時代背景に則せば、「満州へ」という意識が出てくるはずだ。おそらく、ここではテキスト発表現在の状況が時代のズレを無視する形で影響しているのである。

つまり、このテキストは、中心的場面の時代設定をテキスト発表現在（一九四三年）の十年程前としているが、その当時の時代背景はあまり考慮していないのである。

これは、テキスト発表現在における、文学運動を取り巻く状況にも大きく関係している。日中戦争が始まってから、台湾では台湾人の「皇民化」が目標化され、いわゆる「皇民化運動」が進んでいた。その中で、四〇年代の日本語文学最盛期においては、テキストに「皇民文学」たることが要求されるようになった。

「皇民文学」とは、「皇民化文学」と表記されることもあるが、大きな把握で言えば「皇民化運動」の方針に即し、それを推進させるテキストのことである。しかし、その具体的な定義は難しい。中島利郎は、「皇民（化）文学」について、

一九四一年（昭和十六年）四月に「皇民奉公会」が成立し、その下部組織として「台湾文学奉公会」が設立された。以降、台湾の作家はすべて「台湾文学奉公会」に組織

されることになった。そして、彼等の作品はその濃淡の相違や裏面の含意はともかくも、戦意の昂揚、台湾の皇民化という方針に従わなければ、発表はできなくなった。つまり、「皇民文学の樹立」が、日本人を含む台湾の全作家に課せられたのである。

と述べている。さらに、従来「皇民文学」の代表作として挙げられていたテキストとして周金波「志願兵」（四一年九月『文芸台湾』第二巻第六号）、王和雄「奔流」（四三年七月『台湾文学』第三巻第三号・つまり「蓮霧の庭」と同じ号）、陳火泉「道」（四三年七月『文芸台湾』第六巻第三号）の三作を示すが、そのうち「奔流」と「道」及び両テキストの作者が戦後再評価され「皇民文学」のレッテルを外されたのに対し、周金波と「志願兵」だけが「皇民作家」「皇民文学」と非難され続けた状況を提示することで、「このように、「皇民（化）文学」とは、時代の変化によってその評価も変転しており、現在においても「皇民（化）文学」は何かということに決着はついていない。」とまとめている。<sup>23</sup>

実際、四三年十一月の「台湾決戦文学会議」においても、『文芸台湾』派に事実上の文芸誌統合を迫られた張文環が「決然と立つて、所見を開陳し、台湾に非皇民文学はありません。若し仮に非皇民文学を書く奴が居れば須らく銃殺に処すべきである、と沈痛の弁を述べた」とあるが、この張文環の発言は、当時の「皇民文学」を巡る状況を端的に表していると言えるだろう。すなわち、「皇民文学」ではない、と認定されることが

テキストにとつても作者にとつても文字通り致命的なことである一方、どんなテキストを書けば「皇民文学」であるかは、誰もはっきりと分かっていないのである。

しかしそのような状況下でも、例えば三〇年前後の台湾における民族運動や政治運動へ言及することは、明らかに危険すぎる。<sup>28)</sup>一方、テキスト内の厳密な時間設定と食い違うとしても、台湾を中心とした「南進」意識の（少年による）提示は、将来の台湾・南方を考える上で、「皇民的」と見られる要素は高い。

このように、「蓮霧の庭」では、テキスト内の時間の時代背景と、発表現在の時間の時代背景とが、「皇民文学」という、曖昧だがそれだけに恐ろしく強圧的な枠組みによつて浸食されているのである。それはおそらく「蓮霧の庭」だけではなく、同時代の全てのテキストが被っている事態であり、そうである以上、注目し、考えていくべきことは、「皇民文学」がテキストと作家を浸食していくこと、それ自体よりも、そのような浸食に対して、それぞれのテキストや作家が、どのように対応しているか、という点にあるだろう。それはまさに、中島の言う「現在まで「皇民（化）文学」は何かということに決着はついていない」、その「決着」を求め、向き合うことに他ならない。

### 「皇民文学」からの逸脱

では、より具体的に、「蓮霧の庭」が「皇民文学」という枠組みの中で、どのようなテキストとなっているかについて検討してみる。

まず、大きな問題は、「蓮霧の庭」において描かれる藤崎家の姿である。

このテキスト内部における藤崎家の人々の姿は、「描かれる」在台日本人家族としてはかなり特異であると言える。何故なら、事業に失敗して零落し、台湾人住居に間借りし、子どもの進学費用にさえ苦しむというこの家族は、少なくとも「皇民化運動」の席卷していた台湾で、台湾人がそれに「なること」を求められるような理想的な「日本人」像とはほど遠いからだ。

もちろん、経済的な状況を抜きにすれば、藤崎家の人々は善良であり前向きであり、善き父、善き母と素直で無邪気な子供達という模範的な家族でもある。しかし一方で、台湾人と組んでの炭焼きから再び事業を起こそうという山師的要素を持つ父「藤崎氏」と、台湾を忌避し日本への帰郷を望み続ける「藤崎君のお母さん」は、在台日本人の模範像からは外れている。

台湾人が模範とし、そうなることが求められる皇民像<sup>11</sup>日本人像は、「台湾に根付くこと」と「日本帝国に忠実であること」との両方を備えねばならないし、その点から言えば、「二十四の年に結婚」し「間もなく台湾に渡つて」来て、「別に大した動機もないが、若気のまゝに新天地に行つてみようかなという漠然な気持」で台湾へやってきたと語る「藤崎氏」には流れ者・山師的な部分が強く、「藤崎君のお母さん」には台湾へ根付く意識が見られない点で、十分な模範たり得ないことになる。

当然のことながら、台湾にいた日本人が全て「模範的」であったはずがなく、というよりも、台湾人に「なること」を強要

したような「模範的」な日本人というのが、果たして存在していたのかという根本的な疑問も生じるのだが、ここでの問題は、「模範的」な日本人の有無ではなく、それに当てはまらない「日本人」像をテキストに顕在化させてしまうことにあるだろう。つまり、台湾人に対して日本人に「なること」を要求している時期に、その「日本人」像のネガティブな面を描き出すことの意味である。

「蓮霧の庭」が発表された当時の台湾文壇の「目指すべき」方向は、先述の通り「皇民化運動」を反映し喧伝する「皇民文学」であった。「蓮霧の庭」の掲載された『台湾文学』には、「奔流」が掲載されていたし、ほぼ同時期に、「道」も発表されている。いわば、「皇民文学」の絶頂期でもあったことになる。

その中で、「蓮霧の庭」の描き出す在日日本人家族の姿は、はつきり異質である。「奔流」にしても「道」にしても、そこでは日本人に「なること」を切実に希求する台湾人の姿が描き出されたのに対して、「蓮霧の庭」の藤崎家は、全くそのような欲望を喚起しない。そして「私」も日本人になることを求めない。藤崎家の人々は台湾人から見て目標にも希望にもならない、むしろ哀れみの対象ともなりかねない立場にある。その上、台湾人である「私」と対等の友人として接する。台湾人に日本人に「なること」を求めないし、「藤崎氏」などは、「私」の母親が「国語」<sup>28</sup>を解さないと知れば、進んで台湾語で対応してしまう。

これは「奔流」の伊東春生（「イトウハルヲ」とルビが振ら

れている）が、台湾人に対しても台湾語を用いず、実の母親を敬遠しようとする姿と対極にある。伊東はもとは朱春生（「シユンセイ」とルビが振られている）であったが、日本人（内地人）の妻と結婚し、妻、義母と暮らすことで、姓名を日本的なものに読み替えているのである。<sup>29</sup>そしてその伊東による徹底的な「皇民化」への意志は、次のような場面に端的に現れている。

玄関の戸が静かにあく音がした。奥さん（伊東の妻―引  
用者）は箸を置いて、玄関へ出て行つたが、

「まあ、台北のお母さんですか。どうぞ御上りになつて下さい。」

といふ声があった。「いゝです。いゝです。わたしすぐ帰ります。みんな元気ですか。」

声の主はどうやら相当な年配の女らしく、そのタドしい国語から、本島人であることがすぐに分かつた。どうしたことか、伊東は少しあはて気味で玄関へ出て行つた。

「何か御用ですか。」

やゝ暫く経つてから、その老婆の声が聞こえた。

「別にこれといった用向きはないんですが、久し振りにあなたの方の様子が見たいし、それに春生、お父さんがこの頃とみに身体が弱つて来て、淋しくてやり切れんといつても口ぐせに云ふてなあ、たまにはお父さんに会ふてやつておくんせえ。」

これは本島語であつた。しまひの所が涙ぐゑに變つて、

はつきりと聴きとれなかつた。「まあいゝから。その中行つて来るよ。」

伊東はまるで棄鉢といった口調で云ひ棄てるや、また客間に戻つて来た。

(中略) 私の頭にちらつと閃いて通つたのは、あの本島の女は伊東の実母に相違ないといふことだつた。それだとすれば、どうして伊東はかくも自分の母を卑下して敬遠せねばならないのだらうか。

ここで指摘したいのは、伊東春生の酷薄さ、ではない。伊東の姿勢は、過剰なものであつたとしても、総督府—日本統治側が要請し強制してきたことに、全てを捧げて応えているに過ぎない。おそらく現在の読者が伊東の姿を読む時、その酷薄さに嫌悪しながらも、彼がそのような姿勢を貫かなければならなくなつた状況への同情と、そのような政策への批判意識を抱くはずだ。<sup>(30)</sup>

では、「藤崎氏」の姿勢はどうであらうか。個人の問題としてとらえるならば、「藤崎氏」の姿勢は批判されるものではなく、むしろその善良さを賞賛されることになるだらう。しかし、「皇民文学」という枠組みを考へるならば、「藤崎氏」が台湾語を用いる箇所は、その方向性に合致しているとはいえない。また、彼が台湾語を用いることができる、というのは、やはり「皇民化運動」にさらされない在台日本人故であり、それ自身が台湾内での差別的な待遇を背景にして可能になつたことでもあるのだ。<sup>(31)</sup>

また、後述するが、「私」と一家の長女である美加子との結婚話に即座に難色を示す「藤崎君のお母さん」の態度も、当時の現実的な状況から考えれば妥当であるにしても、建前上であれ「内台融和」を提唱していた「皇民化運動」期の方向性とは相容れない。

このように、「蓮霧の庭」の内部では、藤崎家の描かれ方それ自身が「皇民化運動」への批判として機能しているとも言えるだらう。なぜなら、繰り返しになるが、このような藤崎家の姿は、たとえ物語内の時間が一九三一年という「皇民化運動」期以前だということを考慮とすにしても、この時期に描かれることが期待される在台日本人像ではないからだ。

「奔流」や「道」は、一九七〇年代以降現在までに、その内容が再検討され再評価を受ける中で、「皇民文学」という「悪名」から脱してきた。しかし、その描かれる問題が飽くまで日本人に「なること」であることに変わりはない。

それに対し、そのような「問題作」を生み出すような時代背景を共有しているにもかかわらず、「蓮霧の庭」では在台日本人家族像を通じての「皇民化運動」へのコミットは見えない。「皇民化運動」をそもそも問題にしていけないのである。南方「進出」などの「お題目」はなぜつてはいるものの、「奔流」のようにそれをテキストの問題系の主軸に据えようとはしていない。むしろ、「皇民化運動」の空洞化を指摘するかのような表現になっているのである。

しかし、それだけであつたら、やはりこのテキストは批判と弾圧の対象となつてしまつたであらう。それがそうならなかつ

たのは、このテキストが、先から繰り返しているように、台湾人と在台日本人の「交流」を描いていることによつていと考えられる。

### 「交流」の「内」と「外」——台湾人の側から

「蓮霧の庭」はもともと単独の先行研究の少ないテキストであるが、言及される場合、必ず取り上げられるのは、「在台日本人と台湾人との交流」という点である。<sup>32)</sup>

このような、いわゆる「内台交流」の場を描こうという方向性は、四二〜三年ごろから見られ始める。「蓮霧の庭」と比較する際に想起されるのは、呂赫若の「隣居」(『台湾公論』第八二号 四二年一〇月)や「玉蘭花」(『台湾文学』第四卷第一号 四三年一二月)だが、在台日本人作家にも、浜田隼雄の「蝙蝠(べんしい)」(西川満編『台湾文学集』所収 四二年八月)や新垣宏一の「城門」(『文芸台湾』第三卷第四号 四二年一月)「盛り場にて」(『文芸台湾』第四卷第一号 四二年四月)「砂塵」(『文芸台湾』終刊号 四四年一月)などがある。

その特徴としては、在台日本人が描く「内台交流」は、ほとんどが日本人教師と台湾人生徒、という関係になっていること、それは当時の台湾の日本人作家たちの多くが学校教員であったこと、同時に学校という場所であれば日本人と台湾人が交流する場がなかったからでもあるだろう。

このような「内台交流」が四二年頃から描かれ始めるのは、「皇民化運動」や台湾人志願兵制度導入などの一連の戦時における台湾人動員の過程で、日本人と台湾人の融和を目指すとい

う流れが作られていたからでもある。これはもちろん、戦争動員をかけようという台湾人を法的社会的に差別しているという状況を隠蔽しようとする試みであるが、逆に言うと、このような動きが現れるまで、「内台交流」は在台日本人作家からだけではなく、台湾人作家からも描かれなかったことが、ここから浮かび上がってくる。

「蓮霧の庭」はそのような時代状況を反映したかのように在台日本人と台湾人との交流を描いており、だからこそ注目される点が「内台交流」の部分に集中するのだが、ここで描かれる「内台交流」は、当然ながら既に述べたように、「皇民化運動」で理想化されるような形のそれではない。

彼らは在台日本人という、台湾人側から見ると外部からの闖入者であるが、夫婦で台湾に二十年以上暮らし、子供達は(おそらく全員)台湾生まれ台湾育ちの「灣生」<sup>33)</sup>で、そして在台日本人居住区に暮らせない程に生活が苦しくなっている藤崎家の人々は、在台日本人社会から、外に追いやられた形になっている。そして、そのような様々な場面において「外部」の存在となっていた藤崎家の人々と交流を深めていく「私」もまた、平凡な台湾人とはやや異なるといえよう。

そもそも、藤崎家の人々も、全ての台湾人と交流しようとしているわけではない。ここで「私」との交流が成立するのは、「私」が中退しているといえ中学校へ進学していた中堅学歴エリートであり、当然日本語能力と、日本的な文化習慣を身につけていることが期待できたからである。故に、「私」以外に同じ住居に暮らしているはずの会社員の郭の家族は、テクス

トの中に一切姿を見せない。

「私」は台湾人住宅に転居してきた藤崎家の人々を当初奇異な目で観察しているが、彼らが台湾人住宅に畳を敷き、風呂も整えるところに納得していく。そして、そのように観察している「私」もまた、自室に畳を敷いているのである。

これは、「私」が日本人の生活・文化習慣に親和的であり、むしろ「台湾的」なるものよりも親近感を抱いていることを想像させる。その点では、「私」は「皇民化運動」に準拠した台湾人であるかのように映る。

「私」はテキスト序盤で、藤崎家の長女・美加子との結婚という「夢」を語る。

しかし、有体にいへば私は美加子さんが好きだ。私は空想の上では、彼女を私の花嫁にして、楽しい生活の設計などを夢見るのであるが、たとへば文化住宅風な自分たちで設計したごぢんまりな家を建て、夜なぞ、満天の降るやうな星屑の下の露台で涼みながら、静かに語り合ふ、要するに荒唐無稽なことを夢想しないこともないが、現実の上では、つひぞ真面目に考へたことはなかつた。

このように「私」が思い描く美加子との将来の「空想」に出てくる情景は、西洋的なロマンチズムに基づいたものであつて、台湾の土着文化、台湾人社会のそれとはかけ離れている。

先に触れた、テキスト後半で病気にかかった「私」の元へ「国語を話せない」母がやって来る場面でも、母の心理描写は

一切なく、

母は国語を話せないものだから、感謝をあらはすためにただ、何度も何度も、ぶざまなお辞儀をした。

藤崎少年のお父さんは片言混りの台湾語で、私の病気は大いしたことはない、安心しなさいといふふうな意味のことを母に話した。

母が私を看護してゐる間にも、藤崎少年のお父さんは、たびたびと来てくれた。

そして衛生知識のない母にいろいろと看病の仕方などを教へてやつた。

という表現しか出て来ない。

これを持つて「私」が母親に対して薄情である、ということを描いたのではない。注目したいのは、「私」の語りの中では、日本語が扱えない人間は心理描写の対象にならないということである。つまり、「私」は台湾人ではあるけれど、そのよつているところは「日本語の時空」であつて、台湾語のそれではないということである。日本統治期台湾の四〇年代に「語り」を行える「私」は、その日本語能力故に、「日本統治」の側に引きずられているのである。

しかし、ここで「私」と「皇民化運動」を分つ大きな断絶が示される。「日本統治」の側に引きずられていながら、「私」は「日本人」の内側に入ろうという意志は示さないのである。それは、美加子との結婚が、「私」にとつて「踏み絵」として立

ち現れていることから明らかである。

「私」は父親の「使途の大部分」がわからない借金を背負い、経済的に苦しい立場にある。老母を親戚に預け、「ひどい薄給」で会社の事務員をしている「私」には、台湾人作家のテクストにしばしば描かれる、「高額な聘金を支払っての結婚」を望むことは到底不可能であつただろう。しかし、そもそもそのようなことは最初からテクスト内で一切触れられない。「私」はそれを望もうとさえしていないのである。

しかし、だからといって、「私」と美加子との恋愛が発展するのかもしれない、「私」はそれも否定するのである。それは次の場面に象徴的に現れる。

「藤崎君」は、「私」の部屋へ勉強に来る場面で、次のように話す。

「ゆふべね、面白いことがあつたよ。お父さんが酒を飲んで、姉ちゃんをからかつてゐるんだ。どうだ、美加子、陳さんのお嫁さんにならぬか、さうしたら姉ちゃんは、真紅になつて知らぬと笑つてゐるんだ。それをお母さんが聞いて、あの方は真面目らしい男だけど、——でもあの方が内地人だつたらね、と父さんに言ふんだ。こんどは父さんは、いや、わしは人物本位だ。あれはおまへの見栄だよ、だつて世間体があるわ、世間体がなんだ。とお父さんは、真顔になつていふんだよ、それでお母さんは黙つてしまつたけれど、今度は、万里子の奴が言ひだしたんだ。うちだつたらあんな奴のお嫁さんになるもんか、あの人、大嫌ひ

だわ。(後略)」

この話を聞いた「私」は、「思はず身内が熱くなるやうな恥しさを覚え」る。

「藤崎君」は「私」が美加子に好意を持っていることを見抜いたわけではない。おそらく「私」の気持については全く無頓着である。しかし「私」が「身内が熱くなるやうな恥しさを覚え」てしまったのは、偶然にもその指摘が自分の気持ちに合致してしまつたからだ。

しかし、この「藤崎君」の話が、「私」にとつて歓迎できる、喜ばしいものであつたかと言え、全くそうではなかつた。それは、「藤崎君のお母さん」の「でもあの方が内地人だつたらね」という一言のためである。

藤崎家の人々は、日常レベルでは「私」と対等の友人として接していて、「私」も特に抵抗や障害を感じることなくその関係を受け入れているが、「結婚」という家庭・共同体の内部に入り込むことになる段階になると、それにはやはり拒否を示すのである。

そしてそれは、「優位」の立場にある在日日本人側だけではなく、「劣位」に置かれている台湾人側の「私」の中にもあるのだ。「私」は、美加子との結婚を「夢想」しつつ、自身の結婚についての現実的な状況について、次のように語っている。

それだから(借金を負い、母親の面倒も考えなければならぬ)ならない状況だから(引用者)、私と一緒にいる女は、おそ

らく不幸であらう。もし私が精神的に優しくていたはりのある持主であれば、女の不幸は、ある程度償はれるであらう。だが、私は平凡な男である。私には優雅な精神があるとは思へない。むしろ、私はよくない男だ。私は精神的にいろ／＼の欠陥をもっている。私はそれをないうやうに粧つてゐるだけだ。

美加子にしたところで、精神的条件を除外しても、いろいろの現実的条件を克服するだけの性格の強靱さをもつてゐないやうに思はれる。

とすれば、私どもは徒らに習俗の重い石にひしがれてしまふことだらう。

それに私はある卑屈な感情に捉はれてゐる。この感情はやがて結婚生活の上に黒い影を投げつけることだらう。

私の友人は内地で、内地人の女性と結婚してゐるが、なにかの拍子に、日常の諍ひでもすると、むきだしになつた感情と感情は、このことに触れるといふ。

ことにこちらでは、もつとそれを刺激するものが多いだらうと思ふ。

それを思ふと、しつかりした女性でなければ、その習俗を背負つて行くことが出来ないだらう。

それゆゑに、藤崎君のお母さんの言葉も、強く反発しきれない何物かがあるのである。

万里子の無邪気な言葉も、反つて面白いと思ふのだ。

(以上、傍線は引用者)

前半部分で「私」が説明しているのは、自身が貧しいこと、そして性格的に温厚ではないことなどが、これはここでの語り方から考えても、「私」の主旨ではない。彼が本当に意識しているのは、やはり後半部である。そしてそれは、婉曲的な表現を用いているものの、はっきりと日本人と台湾人との間の差別意識の存在を指摘し、それ故に美加子との結婚を「現実的に」考えることが出来ないとして述べているのである。

つまり、美加子には差別を乗り越えて「私」と結婚するだけの「強靱さ」はないであろうと想像し、故に、結婚したとしても、民族と文化の違いと差別意識の「習俗の思い石にひしがれてしま」い、また自分自身がそもそも日本人に対する劣等感、「卑屈な感情」を持つてゐるから、結婚は無理であると考えているのだ。

そして、この考えは無根拠なものではなく、「内地人の女性と結婚してゐる」友人も、「日常の諍ひ」程度のこと、妻に民族差別的な発言をされる(あるいは、友人の方が劣等感をあらわにして妻を非難するのかもしれない)ことがあるという話からも、自身の想像は蓋然性が高いとしている。このように、差別意識によつて相手を忌避する姿勢が、優位にある側(在日日本人)からだけでなく、劣位にある側(台湾人)からも示されるのである。

その結果、「私」は根深いところでの差別意識に基づく「藤崎君のお母さん」の発言についても、「強く反発しきれない」と述べてしまう。

これは、生まれた時から被差別者であることを強制された日

本統治期以降に生まれた台湾人にとって、「自分は差別される存在である」そして「在台日本人は自分を差別する存在である」というこの二点は揺るぎようのない状態として心身に刷り込まれていることを示している。「私」はその差別意識の不当性を指摘することの無意味さを、誤解を恐れずに言えば、「生まれた時から分かっている」のであり、故に「私」の意識は「藤崎君のお母さん」への反感を呼び起こさないのである。

一方で、「私」の最早「常態」とも言える「在台日本人は自分を差別する」という意識は、万里子の発言をさまざま差別意識から発せられたものと判断してしまう。

万里子が「うちだつたらあんな奴のお嫁さんになるもんか、あの人、大嫌ひだわ」というとき、彼女が「私」のことが「大嫌ひ」な理由はわからない。家族みんなが評価する青年に対して、幼い反発心を抱いたのかもしれないし、姉が嫁するかもしれないと真に受けて、姉を奪われることを恐怖したのかもしれない。あるいは、本心では万里子も「私」のことが好きであるのに、姉との結婚話を進めるかのような話を出され、天の邪鬼な態度を見せたのかもしれない。もちろん、万里子が幼いながらも台湾人への差別意識を既に抱いていて、日常自分の家に入り込んでくる台湾人青年に不快感を抱いていた、という可能性がないとは言わないが、藤崎家の家庭環境から考えると、この時期の万里子がそのようなはっきりした民族差別意識を持っていると考えるのは厳しいであろう。

それでも、「私」は万里子の発言が差別意識の裏付けを持ったものと感じ、それを「無邪気」とまで言ってしまう。この

き、「私」の示す諸観は、彼個人のそれではなく、当時の台湾人の置かれている状況をも表象しているといえないだろうか。「私」は、良心的な在台日本人と対しているとしても、常にその言葉・態度の中に、自分への差別をはらんでいるのではないかと、という緊張と恐怖を強いられているのである。それこそ、たとえ「結婚したとしても」。

### 「交流」の「内」と「外」——在台日本人の側から

一方また、ここでの「藤崎君」の発言は、藤崎家の人々の台湾人に対する認識の限界も表現している。「藤崎君」がこの話を「私」に告げたのは、おそらくは恋愛話にかこつけて「私」を軽くからかおうという意図があったのかもしれない。しかしこのとき、この「結婚」を巡る一連の会話が、台湾人蔑視を前提としたものであることに「藤崎君」は気付いていないのである。「でもあの方が内地人だつたらね」という母親の言葉が、「内地人ではない」という解決しようのない理由で拒絶されることになった「私」にどのように聞こえるか、ということについて想像出来ないのだ。

「藤崎君」がまだ少年であるという事情を考えても、台湾人である「私」に対してこのような話を「面白い話」と思っているところから、「藤崎君」がやはり「在台日本人」であることが再確認されるだろう。彼は、「内地人ではない」ことが台湾人との結婚を拒否する理由となることに違和感を感じないのである。生まれた時から台湾で暮らしている「藤崎君」はそのような台湾の状況を客観的に判断することが出来なかったの

だ。

そして、その元となる発言をした「藤崎君のお母さん」も、「私」に対して内地のすばらしさを繰り返し強調する。例えば次のような箇所である。

「いまごろは内地は、とても氣候がいいですよ。すつかり秋めいて、山は紅葉で赤らんでゐるし、さう、さう、あなたは紅葉を知らないでせう。一度、内地へおいでなさるといいわ。山は燃えるやうに真つ紅なんです。そのうつくしさつたら——それにこちらはどうでせう。十一月も未だといふのに、こんなに赫々と照りつけてゐますもの。」

「でも内地はいいわ、ああ、帰りたい。空気がからつと澄んでゐて、こちらのやうに淀んでゐやしない。かういふ歌があるが、知つてゐる？（みづうみの氷は解けてなほ寒し、三日月の影 波にうつらふ）これは信州富士見にある島木赤彦の歌碑なんですけれど。こんな境地は、こちらにはないですよのね。それに頼つても林檎のやうに赤らんで、ほんとにきれいですよ。こちらのやうにドス黒くないわ。（後略）」

「……でも心臓さへなんでもなければ一生をここで我慢するけれど。」

（以上、傍線は引用者）

このように、「藤崎君のお母さん」による「内地の賞賛」は、ほぼ全て「台湾の否定」と対になっている。内地を離れずで二十数年を経ている「藤崎君のお母さん」に、内地の環境についての皮膚感覚が現実的なものであったとは想像しにくい。である以上、彼女は実際の皮膚感覚にある台湾の環境を基準に、内地を「空想」しているのである。そしてその「空想」は、「私」が美加子との結婚について抱いた「空想」と同じく、相手＝台湾への拒絶の屈折した表れなのだ。

このような「藤崎君のお母さん」の発言は、在日日本人の一世のステレオタイプのものでもあるだろう。特に彼女は、自ら望んで台湾へ来たのではなく、夫についてきただけという意識もあつたに違いない。そして、台湾に対して拒否の姿勢を維持しようというのは、一世として、自らの「日本人」意識を保つためにも必要な行為であつたのかもしれない。

「藤崎君のお母さん」の立場から考えれば、湾生である自分の子供達は、想起する「故郷」を持つていないことになる。生まれ育つた「台湾」がそれに当たると考えるには、一世である彼女には「台湾＝他者」の意識が強すぎる。故に、恐らく「藤崎君のお母さん」にしてみれば、自分の子供達は「故郷」を喪失しており、またその子供達が台湾を「故郷」と認識しかねない事態は、彼女にとっては子供の喪失とも感じられたのではないだろうか。

先に挙げた、「藤崎君のお母さん」の述べる「内地の情景」は、その中に「信州富士見」という表現があることから、長野県の山村を基本にイメージしていると思われるが、そのような

内地のごく一部の地域を、「いまごろは内地は、とても気候がいいですよ。」と「内地」全般が一樣であるかのように拡大して話し、「あなたは紅葉を知らないでせう。」と「内地」を知っていることそれ自体を自身の優位性の裏付けとして語ってしまったことに、「藤崎君のお母さん」の焦燥と悲哀が現れている。彼女の中で、自身が間違いなく「日本人」であることの裏付けとして残っているのは、最早「内地」の記憶だけなのである。かつて豊かであった時は、経済的な余裕をもって自らと台湾人とを差別化することができたが、困窮して台湾人住居に暮らすようになった今、その自己確認も出来ない。その上、子供達は、自分と違って「内地」の記憶を持たず、むしろ進んで「台湾化」していこうとしている（と、彼女の目には映る）。例えば、「私」と台湾人の市場へ行き、台湾料理を好んで食べるなどといった「藤崎君」の食習慣が台湾化していく際の反応にも、それは見て取れるだろう。

食物といへば、藤崎少年は、甜粿といふ台湾餅が大好物であつた。

それは、あつさりした風味のもので、火で焙つたり、あるいは油でいたみつけても、おいしいものであつた。

それから肉豚料理も好きであつた。ことに臓物も平気で食べた。

藤崎少年は、豚の臓物を買つて料理するやうに、お母さんにせがむのだが、

「そんなものは、食ふ氣になれぬ。」

いつもはねつけるのだつた。

それで藤崎少年と私は、こつそりと市場の飲食店にできては、豚の胃袋だの、脳味噌などをとつて食べた。

これは正に彼女にとっては、皇民化に逆行する状態であつた。これは、「藤崎君」たちの将来が、台湾人と公平・公正な状況を生み出すであろう、という「予想」を言っているのではない。仮に日本統治が一九四五年で終わらなかつたとしても、「日本統治」であるかぎり、台湾内部で台湾人への差別体制が解消されることはなかつただろう。ここで指摘しておきたいのは、在台日本人が、台湾人と公平・公正な「場」に立つということがない、ということを前提にした上で、在台日本人の内部で、主として「世代」を理由とした断絶・懸隔が生じていた、ということである。「藤崎君のお母さん」は、日常生活の上では貧しいながらも幸福な家庭に恵まれているが、国家と民族―「ナショナルリテイ」の意識が、彼女に孤独感を与えていたのである。

台湾人との親密な交流をしている、「良心的」と映る日本人家族の中でも、その「交流」についての感覚のズレが生じているのである。

### 「描く」台湾人と「描かれる」在台日本人

そして結局、「藤崎君」の話に出てきた美加子との結婚話は、「藤崎氏」の口から出てくることはなかつた。「藤崎氏」は蔡という台湾人の「十年來の老朋友」も持つが、これは「私」と

の関係と類似するもので、異民族間の「友情」の場面は、民族差別という状況の中でもしばしば見ることができることである。

「私」は「藤崎君」たちとともにこの蔡の炭窯を訪れた後から「腹チフス」を発症し、伝染病患者として隔離されることになるが、その時にも、「藤崎氏」の手厚い看護を受けており、彼の善良さが強調される。

この発症時には、「藤崎君」が、差し入れの重湯と林檎汁を持ってきた時に「しばらくためらったのち、「重湯も林檎汁も、姉が拵へた。」とこつそり、私に言つた。」という場面がある。つい先日まで、美加子と「私」の結婚を笑い話にしていた少年らしからぬ反応だが、わざわざ「私」のために重湯と林檎汁を作った姉の行為に、冗談以上のものを感じ取った「藤崎君」は、ここで「私」が「台湾人」であることを意識し始めたのかもしれない。そしてその意識は、やはり隔意、差別へと繋がるものだったのだろう。

この病気の回復後二年ほどして、「私」は「台北に住まなければならぬ」くなり、藤崎家の人々と別れることになる。その後、五年間程は手紙のやりとりをしていたが、「私」が山間部で転地療養をし、半年ほどして戻ってきた時に、今度は藤崎家が転居していて連絡が取れなくなってしまった。そして更に五年後、「戦地」から「藤崎君」の手紙が届くという形で再会の手配がなされていく。

「私」と「藤崎君」が一緒に勉強していたのがこの再会から十二年前だとするなら、再会の時点では、「私」は三十二歳、

「藤崎君」は二十四〜五歳ということになる。「藤崎君」はすでに除隊しているものの、「戦地」を経験している。一方、四年には既に「志願兵」<sup>37</sup>制度が実施されているが、「私」はそれに参加していない。

冒頭で「私」は「藤崎君は、現在の私にとつて次元の世界に住んでゐる。というのは私は戦場を知らない。硝煙の匂ひがわからない。」と述べているが、このように、特に日本人、台湾人という徴兵に際して区別が存在している立場の人々が同じ時空にいる台湾という場所において、「戦場経験」というのは、人を「次元の世界」<sup>38</sup>に隔てる経験になっている。

基本的に「藤崎君」は父親のように善良な青年になっている。故に、「私」に対して礼を失つたりはしない。しかし、逆に再会時の「藤崎君」の態度に、かつてはなかった「私」への「気配り」「礼儀」の存在を感じさせること自体が、彼が「在台日本人」と「台湾人」の「別」を意識するようになったことの証でもあるだろう。

「藤崎君」は、藤崎家の人々の消息を「私」に伝える中で、姉の美加子については、「あれは、もう三人の母親ですよ」と結婚していることを告げる。それ以上の情報はないが、想像するならば、相手はやはり日本人であろう。それは、「まあ、平々凡々といふところさ。」<sup>39</sup>という「藤崎君」の評価にも現れている。「日本人同士の結婚」<sup>39</sup>が、在台日本人にとっての「平凡」であるはずだからだ。

そして、次女の万里子についても、ここで触れられる。

「まあ、今夜は僕（私）のこと——引用者」とこに泊つてゆつくり語らう。何しろ十年ぶりだ。こんなうれしいこととはないよ。他人には思へないんだ。何だか身内の者のやうな。——お父さんには御迷惑かけたな。」

「それや僕だつて、妙な話なんですけれど、ときどき、しやつくりのやうに、あなたのことが思ひ出されてくるんだ。妹の万里子は、あなたに会ひたいとか言つてゐた。むかし、あんなにあなたを嫌つて、悪口を言つてゐた奴が——。僕は精神は成長しなければならんし、それはあくまで誠実であるべきだと思つて——。」

前述の通り、この場面以前に万里子の描写が少ないため、果たして万里子がどの程度「私」を「あんなに」「嫌つて」、「悪口を言つてゐた」かどうかはわからないが、この「よくわからない」万里子の言動を、語り手である「私」は、先のように、「万里子が「私」に対して、民族差別の意識を持つていたことが原因である」と考へている。

「藤崎君」の発言は、歯切れが悪く、結論を明確に述べていない。それがこの場面の理解を難しくさせているのだが、それを、「私」は飽くまで自らの視点の判断で捉え、テキストに表明していく。

「しかし、なんですな。民族とか何とか言ひますけれど、要するに愛情の問題ぢやないでせうか。なにごとによらず私どもを結びつけるのは愛情だからね。理屈はつまらん。

愛情なんだ。大橋までぶらぶらあるいて行きませうか。涼しい河風にも吹かれながら、未来のことを語らう。」

少なくとも藤崎君は明言していない万里子の言動の動機を、ここで「私」は「民族とか何とか言」つたことだと断定してしまふ。このテキストにおいて、「民族」という言葉が出てくるのはここだけである。「習俗の重い石」や「現実的条件」と言つた婉曲的表現を用いていた私は、この最後の段階に来て「民族」という直接的な表現を持ち出すのである。

そして、その「民族とか何とか言」うことをすぐさま否定する。「要するに愛情の問題」にしてしまふのである。ここで、「私」は「理窟はつまらん」とも述べるが、ここで「私」が把握している「理窟」とは、在台日本人と台湾人は「違ふ」というシステムであり論理であるだろう。それを「つまらん」ということは、被植民地人である「私」にとっては挑戦でもある。しかし、その挑戦は、「要するに愛情の問題」という主張の中で隠されてしまふ。「私」はここで、意思表明においてかなり危ういラインを伝つてゐるのだが、それを「愛情」というどこからも否定されない「非政治的な」主張で切り抜けるのだ。

「私」と藤崎君は二人ともすでに成人となり、お互いの立場の違いもはっきり認識するようになってゐる。双方の関係性がただ「愛情」では片付けられなかつたからこそ、今のような状況に至つてゐることは、よく解つてゐるはずである。それを敢えて「愛情の問題」にこじつけたのは、つまり実際には「民族の問題」が両者の間にはっきり横たわつてゐるからだ。そして

「私」は、「藤崎君」の曖昧な言動を、進んで「民族の問題」として捉えることで、その問題の実際を「表面化」させようとしつつ、「愛情の問題」とすることで「問題化」するのは避けたいのである。

また同時にこの「私」の発言は、彼自身が、どうやって「民族の問題」を自分の意識下から取り除くことができなことを示している。それだけ強烈に、「私」は日本帝国の植民地統治に支配されているのであり、「私」と台湾人の置かれた状況の過酷さを表している。このテキストでは、「内台交流」が描かれ、善良な在台日本人家族と、日本統治下の社会体制に順応した日本語話者・日本型社会の理解者である「私」との、穏やかな関係を描き出している、それだけに見せながら、「それだけに」、潜在する日本統治の差別性、作り出された断絶・懸隔の大きさをも表現しているのである。

故に、「私」がここで、「藤崎君」の言動をすぐさま「民族の問題」として受け取ってしまう事態に、「蓮霧の庭」と、そこに描かれている台湾の時空に潜在している関係の錯綜が象徴されている。「私」は藤崎家の人々を「身内の者のやう」に思っていると述べている。自らの「内側」の人々と表明しているのである。でありながら、「藤崎君」の話聞いて、すぐに万里子の言動を民族差別に結びつけてしまう意識から逃げられなかった。日本語エリートになりかけた「私」は、強く「日本」側にひきつけられているが、逆にそれ故に、彼は「日本」なるものに過敏であった。「私」の「藤崎君」の話に対する反応は、一種の「被害妄想」のようにも映るが、問題なのは、「私」が

「身内の者のやう」と思っているはずの青年の言葉であつても、容易く自らへの差別に根ざしていると受け取ってしまう程、「在台日本人」という立場は特権的であり隔絶しているものであったということである。

「藤崎君」の発言がどのような考えに根ざしていたのか、それはテキストからは判断できない。もちろん、「私」の判断通り、「民族差別」に基づいたものである可能性は十分にあり得る。しかしここで重要なのは、何に基づいているかを明らかにすることではなく、それが明らかでなくとも、視点人物が台湾人であるとき、それが否応なく「民族差別」に直結するテキストの構造であり、そのようなテキストを生み出さざるを得ない台湾人日本語作家・龍瑛宗の立場にあるのだ。

そして同時に、この龍瑛宗の在り方と「蓮霧の庭」の構造は、台湾人が「在台日本人」を描くことの困難と限界を浮き彫りにしている。

「蓮霧の庭」は、例えば先に挙げた呂赫若による在台日本人を描いたテキスト（「玉蘭花」「隣居」）に比べて、圧倒的に在台日本人側の位置づけに踏み込んだ描き方をしている。在台日本人について、「観察」レベルではなく、双方が互いの「内側」へ立ち入っていくレベルの交流が描かれているからである。

しかし、そのような「交流」を描きながらも、ぎりぎりのところで「在台日本人」の心理描写には踏み込まず、語り手は「台湾人」の「私」として、その心理を推測していくことまでしかできない。「台湾人」の視点から逃れては描けないのであ

る。

そのような「蓮霧の庭」の構造は、『台湾文学』の標榜する「リアリズム」<sup>(4)</sup>の限界を指摘するものでもあるだろう。

「台湾の現実」を描くことを「リアリズム」の一環として掲げる時、彼らもいずれば「在台日本人」の描き方によつたはずである。日本帝国の敗戦と台湾からの撤退によつてその衝突は未然に終わったが、来るべき衝突に『台湾文学』は準備が出来ていたのだろうか。

「在台日本人は台湾の生活を描かない」という批判をなすとき、「台湾人が在台日本人の生活を描けるのか」という反論も十分想像できたであろう。もちろん、法的社会的に日本人から差別されている台湾人にとって、在台日本人を描くということは在台日本人が台湾人を描こうとするの何倍も困難なことであろうし、少数派である在台日本人を描く必然性も感じていなかったのかもしれない。しかし、「在台日本人がいる」ということもまた、台湾にとつて動かし難い「リアル」であつた以上、『台湾文学』にはそのように批判される余地が存在していただけないだろうか。

### 「蓮霧の庭」の内と外

このテキストが「蓮霧の庭」と名付けられているのは、「私」の持つ「藤崎君」の思ひ出が、台湾式住居の庭にある蓮霧の木の下、ハーモニカで「荒城の月」を吹き鳴らす「藤崎君」の姿が鮮明であつたからである。また、この蓮霧の木の庭を持つ台湾式住居での思ひ出、という意味も込められている。

「私」は内地へ行った経験が無いにもかかわらず、「荒城の月」といへば、内地の老松と澄んだ月と古い歴史の堆積を思はせる」と述べる。見たことのない情景を「思は」される「私」は、日本語・日本文化・日本文学の文脈の中でしか語らない（語れない）のである。

しかし、そもそも土井晩翠が仙台の情景を想起して作つた詞に、滝廉太郎が大分県竹田を想起して作つた曲を充てた「荒城の月」という唱歌に、地域性を求めることが本来無意味なのではないだろうか。むしろ、東北地方・仙台の情景と九州地方・大分県竹田の情景とが重ね合わされる中で、「内地」の強引な一様化と、それがさらに植民地で唄われる意味を考えた方がいいのかもしれない<sup>(4)</sup>。つまり、「荒城の月」に付された「内地の老松と澄んだ月と古い歴史の堆積を思はせる」という感覚自体がフィクショナルなものではないだろうか。

この時、「藤崎君がそれを吹くと、そんな情景よりも南国的情緒に誘はれるものがあつた」という「私」の語りは、「荒城の月」に付与される「内地」性の危うさを、結果的に指摘していることになる。ハーモニカを吹いている以上、そこでは「歌詞」は存在せず、ただ音と旋律のみを聴いている時、そこになんらかのナシヨナリテイが必ず合わせて想起されるはずだ、という考え方の方こそ、疑つてみるべきなのだ。「藤崎君」が、南方植物である蓮霧の木の下でハーモニカを吹き、その音楽が「南国的情緒」を誘うのだとしたら、「私」はその感覚を想起させる自身の所属意識について考えなければならぬはずだ<sup>(4)</sup>。それでは、この「南国的情緒」を想起させる蓮霧とは、どん

な植物なのだろうか。

蓮霧はフトモモ科の常緑小高木で、林檎を小振りにしたような果実をつける果樹である。原産はマレー半島で、台湾をはじめ亜熱帯・熱帯気候の地域に分布している。果実の食感は梨に似ているが、甘みは薄い。

おそらく、台湾に関係を持たない人々は、この「蓮霧」という言葉を聞いても、それが果実であることは分からないであろう。蓮霧はバナナやパイナップル、マンゴーとちがって、戦前から現在まで内地・日本国内に輸出されたこともほとんどない。日本人にとって、ほぼ未知のものである。

龍瑛宗は彼の後の世代である周金波や陳火泉といった作家のように「皇民作家」と断定されてしまうことは少なかったが、『文芸台湾』によっていたこと、そして四〇年代にも時々内地雑誌にテキストを発表していたことなども含め、『文芸台湾』派に向けられていた「中央文壇志向」の作家であるという批判対象に含まれていた。「台湾新文学運動」に対してコネクションをほとんど持たなかった龍瑛宗は、西川の接近を拒まず、結果的には互いに互いを十分に利用した。西川は「台湾」を名乗る文芸誌に「大物」台湾人作家を擁することが出来たし、龍瑛宗は西川の持つ資金力と総督府と結びついた権力とによって安定した作家活動が続けることが出来た。おそらく台湾銀行という官立組織で働いていた龍瑛宗は、そもそも総督府の反感を買っていた『台湾文学』への移籍は難しかったであろう。

東京留学も中学校以上の学校への進学も叶わず、自らの上昇志向を就職に向けてることしかなかった龍瑛宗にとって、台湾銀

行員という地位は価値があるものであっただろうが、同時に彼はそれによって制約を受けざるを得なかった。専業作家として生きていくことが出来ない以上（それが出来た人物は台湾島内にはいなかったであろうが）、彼が『文芸台湾』に寄るしかなかったことは必然的な流れだったと言える。

しかし、西川寄りとはいえず、『台湾文壇』で着実に経歴を重ねることで、龍瑛宗は自分の選択できる幅を少しずつ押し広げていった。そして、台湾銀行を辞め、『台湾日日新報』社に転職したことも大きかった。前述の通り、おそらく『台日』の職も世話をしたのは西川であろうが、西川を抜きにしても、龍瑛宗の作家としての台湾での存在は大きなものになっていた。このとき、西川との関係が悪化したとしても、彼は『台日』でやっていける目処を持っただろう。それだけ、彼の台湾人作家としての位置が強化されたということでもある。

そして『台湾文学』へ、二年遅れて移籍することになるのだが、この「リアリズム」「台湾の生活に根ざした文学」を標榜する文芸誌に移ってきた時、龍瑛宗はその傾向と対策を十分に考えたはずである。既に述べたとおり、彼はほともと、内地雑誌に書く場合、『文芸台湾』に書く場合、総督府機関誌である『台湾時報』に書く場合、大衆誌である『台湾芸術』に書く場合；などで、かなりはつきりテキストの内容・傾向を変えていた。それはあざとさも感じるものであったが、特定の安定した所属集団を持たなかった龍瑛宗は、その時々々の傾向と対策に、自らの作家としての生き残りをかけていたのである。

そのように見る時、「蓮霧」という台湾土着に近い果樹をタ

イトルに選んだのは、彼の「台湾にの生活に根ざした文学」というテーマへの応答となるだろう。そして、テキストの内容も、デビュー作である「パイヤのある街」以降龍瑛宗テキストについて回っていた「台湾人知識人青年の批判的な描き方」はなくなり、その悲哀がクローズアップされている。その上に、タイムリーなテーマである「内台交流」を組み入れたのである。

龍瑛宗自身が、このテキストに相応の自信を持っていたことは、版下作成まで進みながら、当局の圧力によって出版されることがなかった彼の短編集のタイトルが『蓮霧の庭』であったことから分かる。龍瑛宗としては、この時期が、いよいよ台湾人からの批判を逃れ、その先頭に立つために進むことが出来る、という段階だったはずである。

しかし、『蓮霧の庭』が掲載された『台湾文学』四三年秋季号は、「大物作家」龍瑛宗の移籍については全く言及しなかった。僅かに、編集後記の中で、「今季号の顔触れは、大体揃つてゐるやうに思われる。新旧の人達を網羅して、それぞれの本分を發揮してゐることは御覧になればわかるだらうと思ふ。」と、大枠で語られているだけである。とても、龍瑛宗が「『文芸台湾』と『台湾文芸』」で述べたような、「台湾文学」の陣地に台湾人たちが全部揃つたことを誇る雰囲気ではない。この随筆に添えられた解説でもある池田敏雄の「『文芸台湾』のほろ苦さ」の中では、龍瑛宗の『台湾文学』移籍を知らなかったとまで書かれている<sup>(4)</sup>。

そして「蓮霧の庭」というテキストもほとんど同時代には注

目されることがなかった。この秋季号で注目され、現在まで評価されているのは、前述の王昶雄「奔流」である。「文芸台湾」に対して『台湾文学』側が用意した「皇民文学」テキストである「奔流」は、戦後早い段階で、登場人物の中学生・林柏年の言動から「逆説的に皇民化を批判し、台湾人意識を見せている」と再評価され、「皇民文学」の不名誉を脱し、作者の王昶雄の名誉も回復された。九〇年代に入ると、さらに陳火泉についても「名誉回復」を行う研究がなされ、続いて周金波も徐々に「皇民文学」の呪縛から解放しようという研究が進められてきた。

そして、そういう点でもきわめて中途半端な位置づけであったのが龍瑛宗であった。彼は「皇民作家」と断じられる程強烈なテキストは書かなかつたが、『文芸台湾』に属していたことと、『台湾文学』の張文環とライバル的關係にあつたことによつて、その評価に影響を受け続けてきた。

『蓮霧の庭』のテキスト内部では、「台湾人居住空間に入り込む在日日本人」と、「在台日本人家庭に入り込む台湾人」というそれぞれ外部の存在が他者の内部に入り込む構図が描かれ、それぞれの内部において、友好的な関係を築きつつも、ぎりぎりのところでその他者性を固持し完全に内部に入り込むことを許さない状況を示している。そしてそれらが、「植民地」という日本帝国「内部」の「外部」において繰り広げられているところ、このテキストの「内」と「外」の錯綜がはつきりと現れているのである。

その上で、このテキストの「内部」がほとんど省みられず、

「外部」の文芸誌競合関係、そして作者龍瑛宗の所属集団の不定からくる「内部」の不在から来る雑誌間の漂流は、『文芸台湾』に在る際は「在台日本人によつた裏切り者」に近い扱いを受け、『台湾文学』へよつた際には「経歴を共有しないよ者」とされてしまい、つねに「内部」の「外部」的存在でもあつた龍瑛宗を立場をも、象徴しているように思われるのである。

そしてそのような事態は、「蓮霧の庭」が龍瑛宗のテキスト群の中で持つ重要性の再認識・再評価を必要とするであろうし、そしてそれが進むことによつて、四〇年代台湾文壇の再評価と、文学・文壇状況の再考察の可能性を、強く示すものにならざるであらうと考へている。

## 注

(1) 『改造』の懸賞創作は、創刊十周年の記念事業として開始された。文芸誌ではない総合誌による新人小説募集としては初めての企画であり、一等入選は一五〇〇円、二等は七五〇円の賞金が出た。第一回の発表は一九二八年四月号で、入選一等は龍胆寺雄「放浪時代」。二等は翌五月号に掲載された保高德蔵「泥濘」である。この受賞時に、龍胆寺と保高は「新人作家の小説発表機会を作るため」の運動を語り合い、後の保高主催の『文芸首都』創刊に繋がつたらしい(保高みさ子「花実の森」、芹沢光治良『文学者の運命』などに記述がある)。そのような経緯のため、『文芸首都』には『改造』懸賞創作受賞者によるテキストが数多く発表されている。龍瑛宗は『改造』登場後にこの『文芸首都』に小説「宵月」を発表し、その後同人となつていく(王惠珍「龍瑛宗と『文芸首都』同人との交流」、『天理台湾学会年報』第十二号、二〇〇三)。また、佳作推薦であつた「パイヤのある街」の賞金は、五〇〇円であつたという(王惠珍「龍瑛宗「パイヤのある街」に与えられた日本文壇の批評」

『野草』第七一号、二〇〇三)。

(2) 「台湾新文学運動」は一九二〇年代に始まつたというのが一般的だが、二〇年代の活動が北京語白話文、また「郷土文学論争」を経て登場した台湾語文の日本人から見たいわゆる「漢文」中心であつたのに対し、三〇年代以降は東京留学経験者による「日本語文」に中心が移つていく。「台湾新文学運動」が二〇年代の「漢文」中心の時期から、三〇年代の「日本語文」の時期まで(より正確には三七年七月の『台湾新文学』廃刊まで)を含めるという判断は、葉石濤「台湾文学史綱」(一九八七、文学界出版社、ただし本稿では『台湾文学史』(中島利郎・澤井律之訳、二〇〇〇、研文出版)によつた)を初め、この時期の台湾文学に関する先行研究に共有されている。よつて、本稿でも三〇年代の文芸誌『台湾文芸』『台湾新文学』の活動を「台湾新文学運動」の一環であるとの判断に基づいて論を進めることとする。

(3) 「台湾新文学運動」参加者から「内地文壇」でデビューする作家の登場を求める声や、それを望む記事は、『台湾文芸』や『台湾新文学』誌上に頻りに掲載されていた。

(4) これらの活動については、王惠珍の「龍瑛宗『改造』第九回懸賞創作佳作受賞訪日旅行覚え書き」(『現代台湾研究』第二四号、二〇〇三)及び前出「龍瑛宗と『文芸首都』同人との交流」に詳しい。彼のテキスト発表先が台湾島内発行メディアを網羅するように多彩であつたことは、『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集』(緑蔭書房、一九九九)第二巻所収の「龍瑛宗著作年譜」(陳萬益・下村作二郎編)からも明らかである。

(6) この点については和泉司の「憧れの『中央文壇』——一九三〇年代の『台湾文壇』形成と『中央文壇』志向」(『文学年報』2、世織書房二〇〇五)で触れている。

(7) 『台湾近代史研究』第三号、一九八一年

(8) 一九四五年以降中国国民党統治下にあつた台湾では、四七年より長期に渡つて戒厳令が敷かれており、日本統治期を肯定的に評価するような言動は許されなかつた。そしてその中で、『文芸台湾』の

経営者であり中心の作家であった西川満は日本統治下台湾の文学運動を語る上で最大の批判対象であった。それは張文環の一九七八年発表の随筆「雑誌『台湾文学』の誕生」（『台湾近現代史研究』2号）にも明らかである。故に、龍瑛宗としては、西川及び「文芸台湾」との関係性については出来る限り希薄化して語ろうとしていることが、この随筆の中から読みとれる。

(9) もちろん同時に、『改造』に登場しその後も内地雑誌にテクストを発表する機会を多く得ていた龍瑛宗への嫉妬も想像できる。

(10) 龍瑛宗は四一年四月に台湾銀行花蓮港支店に転勤しているが、この生活はかなり淋しいものであったことがテクストからも推察される。龍瑛宗の花蓮体験については、王惠陳「龍瑛宗の『客家発見』」花蓮体験によりえがいた客家人」（『関西大学中国文学会紀要』第二五号 坂出祥伸教授退休記念号 二〇〇四年三月）及び「龍瑛宗の『原住民族発見』」花蓮体験がもたらした意味」（『野草』七四号 二〇〇四年八月）に詳しい。

(11) 例えば、「パイヤのある街」をはじめとする内地雑誌での発表テクストでは台湾の紹介的な表現が多く、また台湾人青年を怠惰な人格として描いたり、台湾の情景を不潔に描写する傾向があった。これが、総督府情報課発行の『台湾時報』での発表テクストになると、時局寄りで、戦争協力推進を主張する内容が示される。『文芸台湾』では、詩作に傾いている西川満に同調するかのようになり、「ふらんすの詩人、ポオル・フォオル」の詩を引用した「村娘みまかりぬ」や、台湾人の学歴エリート青年を俗物的に描いた「邂逅」などを発表していた。また、日本の敗戦直後には、「青天白日旗」などをはじめとする日本非難・中国国民党賛美的なテクストを素早く発表している。

(12) 「糞リアリズム論争」については、垂水千恵「糞リアリズム論争の背景―『人民文庫』派批判との関係を中心に」（『文学年報』1二〇〇三 世織書房）を参照。

(13) この号の「社報」中に「龍瑛宗君は編集同人を辞されました。」とある。この点については、松尾直太氏にご教示をいただいた。

(14) 「氏は、最近感ずる処あつて、『文芸台湾』の同人を去つて台湾文学の同人になり、秋季号に「運霧の庭」を発表、近く単行本として創作集や随筆集も発行される（後略）」という箇所がある。ところで、この記事で黄得時（一九〇九〜九九、台北帝国大学を経て『台湾新民報』文芸欄記者となり、後には文化部長となった。さらに自らも文芸評論活動や作家活動を続けている。四〇年に『文芸台湾』同人として参加したが、『台湾文学』分裂にも参加。『文芸台湾』及び西川満批判を行い、『台湾文学』の中心のイデオログとなる。ただし、黄得時自身は、『台湾文学』に執筆しながらも『文芸台湾』同人を辞めてはおらず、同人一瞥にはその名前が残っていた。戦後、台湾大学の教員となった。）は龍瑛宗を絶賛しているが、『台湾文壇建設論』（『台湾文学』第二巻第二号 四一年九月）では批判的に論じていたところとの差が大きい。黄得時が文学性よりも党派性を重視していたことの傍証になるであろう。

(15) 楊雲萍（一九〇六〜二〇〇〇）は、日本大学予科、文化学院文学部創作科に内地留学した後、三二年に帰台。漢詩や文芸評論を発表するようになった。西川とは、三九年の台湾詩人協会発足時から親交が始まり、そのまま『文芸台湾』の同人となった。龍瑛宗とならび、『台湾文学』の分裂後も『文芸台湾』に残った数少ない台湾人作家の一人。戦後は台湾大学歴史系教授となった。以上、(14)(15)の注については、中島利郎編著『日本統治期台湾文学小辞典』緑蔭書房 二〇〇五）を参照した。

(16) 前出龍瑛宗『文芸台湾』と『台湾文芸』。

(17) しかもその記事「糊と鉄と面の皮」黄得時氏「台湾文学史序説」を読む時は、龍瑛宗と楊雲萍が登場した『台湾文学』秋季号に掲載された黄得時「台湾文学史序説」への痛烈な批判であった（掲載は『文芸台湾』第六巻第五号 四三年九月）。

(18) 四三年十一月に、台湾の作家たちが集まって開かれた台湾決戦文学会議において、西川満が「文芸雑誌の戦闘配置」と称して『文芸台湾』の総意による「文芸台湾」の献上を叫んで、赤誠を披瀝した。これは実際には台湾内の文芸誌の統合を意図したもので、常々

『文芸台湾』と『台湾文学』の統合を目指していた西川が総督府と組んで行った策略とも言われている。この会議の結果、『文芸台湾』と『台湾文学』およびその他短歌雑誌などが「献上」によって廃刊となり、四四年一月に統合文芸誌『台湾文芸』が創刊された。中島利郎「西川満と台湾決戦文学会議」『大田進先生退休中国文学論集』(中国文学研究会 一九九五)を参照。

(19) 正確には、「蓮霧の庭」と同時に詩「蟬」も掲載されたが、ごく短いものであるので、本稿では考察対象としていない。

(20) 「藤崎氏」の年齢は、(二)では「私」は、「藤崎氏」自身が「(前略)わしは四十九、来年になつたら五十で、(後略)」と語っていて、テキスト内での整合性がない。ただし、「藤崎氏」の正確な年齢は本稿にとって重要ではないので、ここでは、おおよそ五十歳ほどの人物という把握がなされればよいと考える。「藤崎君のお母さん」の年齢は明示されず、万里子については、正確には「十二かそこら」と述べられている。「藤崎君」も中学校受験を控えているということは満十二歳ほどであり、このままでは妹である万里子と同じ年になってしまいが、ここでの年齢は当時の慣習で数え年であるうから、テキスト内の年齢表現で言うところ、「藤崎君」は十三歳となるだろう。

(21) これは「腸チフス」の誤植であろう。当時の台湾では「腸チフス」患者が非常に多く、その対策が急がれていた。

(22) 何故なら、「皆中学校へ行かせる」と言う時、「藤崎氏」は間違ひなく「皆」の中に台湾人家庭を含めていないからである。また、経済的理由で中学校を中退した「私」の心中をあまり忖度しているとも思えない発言である。

(23) 「藤崎氏」の取引先の倒産と夜逃げには時代の影響があるかもしれないが、それを判断する材料は示されていない。

(24) 中島前掲『日本統治期台湾文学小辞典』の「皇民(化)文学」の項目を参照。本稿の論者も、周金波に対する従来の評価については中島とほぼ同様の立場と意見を持っていることを、和泉司「青年が

「志願」に至るまで」(『三田國文』四十一号 二〇〇五)で示している。

(25) 『文芸台湾』終刊号(四四年一月)掲載の「台湾決戦文学会議」の議事録より。もちろん張文環は「皇民化」イデオロギーに固執しているのではなく、「非皇民文学」を書いているのではないかと、という「台湾文学」への批判と圧力に対して反駁し、『台湾文学』を擁護しているのである。

(26) さらにここには、「作者」龍瑛宗が、三〇年に官立組織である台湾銀行に入行したばかりであり、その当時の立場から目状況からも、台湾の民族運動や政治運動に関わる経験をしているはずがなく、その点においてリアリティのある描写(あるいは、危険性を避けるといった巧妙な描写)をそもそも行えないということもあるだろう。一方で、「藤崎氏」の経済的破綻の細かい描写には龍瑛宗の銀行員としての知識の利用が見られる、というように、「作者」の経歴がテキストの方向性や描写対象に反映されていることも指摘しておく。

(27) それは、在台日本人作家のテキストであっても同様である、本稿論者は考えている。そこにはもちろん、西川満などの現在総督府寄りの作家とされている人々もそれも含めている。本稿ではそれらのテキストに対する「皇民文学」の浸食について論じる紙幅はないが、必ず言及しなければならない問題である。

(28) 日本語のこと。

(29) テキスト内では明示されないが、おそらく伊東春生は、内地人の妻との結婚に際し、妻の戸籍に入ったと思われる。そうすることで、法的には内地人と同じ待遇を得られるからである。内地人の妻の戸籍にはいることで内地人待遇を得られる特例的な例は、官庁における「六割加俸」の制度で、これは台湾勤務となった内地人の公務員に対し、本俸に六割の加俸をするという制度である。本来は人氣のない台湾勤務に人材を集めるための措置であったが、少数ながらも徐々に誕生していた台湾人公務員にとっては、非常に差別的なものに映っていた。が、この制度の抜け道として、内地人と結婚

し、その戸籍に入ることによって内地人の養子となれば、台湾人公務員もこの「六割加俸」を受けることが出来るという方法があった。また、内地人籍に入ること、出世の可能性も広がったらしい。この点については、龍瑛宗のデビュー作「パイパイのある街」の中でも、主人公である街役場の雇員・陳有三が次のように独白する場面がある。

(前略) それに儂い望みかもしれないが、あはよくば内地人の娘と結婚しよう。そのために内台共婚法も布かれたではないか。

しかし結婚となると先方の養子になった方がいゝな、戸籍上、内地人籍になれば、官庁なら六割の加俸が来るし、その他なにかにつけ、利益があるからだ。いや／＼そんな功利的な考慮を埒外に押しやつても、比類亡き従順さと教養の高いしかも麗はしい花のやうな内地人娘と一緒にすれば自分の寿命を十年や二十年位縮めても文句はないぞ。だがこんな安月給ぢや、どうにもならないぢやないか。そうだ、勉強だ、努力だ、それが境遇の凡べてを解決するであらう。

伊東の場合は、私学の「大東中学校」の国文科教員であり公務員ではない。また、彼は陳有三のような功利的打算的妄想的な理由は全く口にせず、ただ「日本精神」を極めるために「国語」常用と台湾人の両親の忌避とを行っている。もつとも、この相違は、三七年と四三年という時代のズレ、そして内地総合誌「改造」掲載テキストと皇民化期の台湾内文芸誌「台湾文学」掲載テキストとの懸隔にもよるであろうから、単純な比較はできない。

(30) むしろ、このテキストで批判されるべきは、このような伊東春生を支持するような語りを行いつつ、実はその揚げ足とりを狙っている語り手の「私」の方であると論者は考えているが、これは稿をあらためて論じたい。

(31) 繰り返したが、厳密に時代背景を考慮すれば、「藤崎氏」が「私」

の母親と会ったのは「皇民化運動」開始以前であるから、台湾語を用いることが運動上の規範に触れるわけではない。本稿では、四三年にそれが表象される、という点に注意して指摘している。

(32) 例えば、山田敬三「悲しき浪漫主義者」日本統治時代の龍瑛宗「よみがえる台湾文学」(東方書店一九九六)では、「運霧の庭」に対して、「私(陳)と藤崎一家のほのぼのとした人情に包まれた少年時代の交流を描いた佳作」その結末はとってつけたような日台融合の一語を締めくくらねばならなかった」と述べられている。誤った理解ではないが、余りにもそれ以外の点を捨象しすぎた評価である。

(33) 「灣生」の日本人は、内地生まれの日本人と比べて、例えば「わがままでしつけが悪い」などと差別される人々でもあった。日本統治期台湾の女性誌「台湾婦人界」は、このような偏見によって「灣生」の女性が、特に結婚に際して内地の日本人男性から忌避される傾向が強いことを頻繁に問題として取り上げている。

(34) あるいは、作者龍瑛宗のレベルに立ち戻れば、彼が台湾語のネイティブではない客家人であるということも影響しているのかもしれない。龍瑛宗のテキストでは、他の台湾人テキストと比べて(あるいは、在台日本人のテキストと比べても)、テキスト内部で使用されている言語が明確に判断できない場合が多い。

(35) 台湾の旧慣的な結婚においては、男性側が女性側の家族に女性の格(家柄、学歴、容姿など)に応じて相当額の聘金と呼ばれる金銭を支払う習慣があった。二〇年代以降の台湾の民族運動・政治運動の中で、この問題は台湾人青年の「自由恋愛」観の浸透とともに封建的であるとして批判対象となっており、三〇年代の「台湾新文学運動」におけるテキスト群には、この問題を批判的に扱うものが数多く見られた。

(36) この表現には、「美加子が強靱な意志を持って自分を愛してくれるならば、何とかなるかもしれない」という願望も投影されているのかもしれない。もちろんそれは美加子に対して過大な要求であるのだが、そのような願いを持ちかねない程「私」の意識の中では、

在台灣日本人との結婚に対する壁は厚い物と意識されているのである。

(37) 一九四一年募集の「陸軍特別志願兵制度」の採用枠は一千名(応募者は事実上の強制によって四十万人を越えていた)だったので、持病のある「私」はおそらく志願しても採用はされなかったであろう。あるいは、それを読者に了解させるために、「私」は自身の病歴を強調しているのかもしれない。

(38) これは「異次元の世界」の誤植であろうか。

(39) 先に挙げた「台湾婦人界」の一連の記事から判断する限り、在台灣日本人女性には台湾人男性を結婚対象としては全く考慮していない。時々「内地結婚」家庭の記事も掲載されるが、そこで台湾人男性と結婚した日本人女性ほぼ全員台湾人男性と内地で出会った人々であり、在台灣日本人ではなかった。

(40) 『台湾文学』は創刊当初から、文学運動の方針として「リアリズム」「台湾中心主義」「リベラル」を標榜していた、とされている。このような方針規定には、対抗誌『文芸台湾』に対する批判・否定の意味も大きい。『台湾文学』側は、特に黃得時を先頭に、『文芸台湾』(実質的には西川満個人)を「ロマンチズム」「内地文壇への進出意識が強い」「独裁的」と見なしていたからである。この両誌の性格規定については、和泉司「懂れの『中央文壇』」(『文学年報』2二〇〇五 世織書房)に詳述している。

(41) 「荒城の月」が旧制中学校唱歌として作られたことも覚えておくべきであろう。つまり、この曲を聴き、「内地の老松と澄んだ月と古い歴史の体積を思は」されるのが出来るのは、「中学校」への進学経験が大きな意味を持っており、それが「私」の位置づけを強化しているからである。またそれを好んでハーモニカで吹くことで、「藤崎君」が「中学校」という共同体への参加意識を強く持つていくことがわかる。

(42) つまり、それならば台湾人である「私」にとつての「南国的情緒」とは果たして何なのかを検証しなければならぬだろう。「私」は、「内地の老松」という言葉や、この「南国的情緒」という表

現にも表れているように、自らを「内地人」と仮構して語る傾向を持つていくことも、指摘しておかなければならない。

(43) 龍珠宗は、公学校(台湾人向けの小学校。日本統治期の台湾では、初等教育は民族分離教育で行われていた)の高等科を出た後、台北の専門学校である台湾商工学校へ進学し、卒業後に台湾銀行へ就職した。台湾商工学校は各種学校の扱いで、卒業しても中学校卒業資格は得られない。つまり、高等教育機関(旧制高校など)への受験資格は得られず、それ以上の進学を望む場合は、中学校卒業資格を得られる学校へ転入するか、専検を受けなければならなかった。ちなみに、「奔流」の作者王昶雄も台湾商工学校を卒業しているが、彼は卒業後すぐに上京し、東京の郁文館中学校へ編入している。

(44) 『台湾近現代史研究』(第三号 一九八二)。該当箇所は次の通り。  
ところで、龍氏と楊雲萍氏だけは、最後まで『文芸台湾』にとどまっていたものと思いきや、本号(『台湾近現代史研究』第三号のこと―引用者)の龍氏の文によってそうではないことが知られる。最後に龍氏と楊氏の離反があったとすれば、それは『文芸台湾』にとつて一つの危機といえるであろう。

文面からも分かるが、池田敏雄もまた西川満及び『文芸台湾』に批判的な姿勢からこの文を書いている。

付記

本稿は、二〇〇六年九月十日(十二日)に台湾・台南県虎頭埤青年活動中心において開催された、台日台湾文学研究者交流会議(国立成功大学台湾文学系主催)において発表された同名の報告を、頂いたご意見、ご批判をもとに修正・再構成したものである。